

日本語で読める クリティカル・シンキング関連文献

岩崎 豪人・久米 暁・吉田 寛

本特集で扱っているクリティカル・シンキングの内容に即した日本語の教科書は、残念ながらまだ出ていない（英語の典型的な教科書の翻訳と日本語の教科書が求められるところである）。英語文献については、次の＜クリティカル・シンキング文献紹介＞を参照。ここでは、クリティカル・シンキングを学ぶ上で参考になるような、日本語で読める関連文献を簡単なコメント付きで紹介する。

＜翻訳＞

ペレルマン『説得の論理学―新しいレトリック』三輪正訳、理想社、1980

価値判断の論理学を求める中で、従来の論理学を越えて、説得の論理学としてのレトリックに向かう。レトリックを文体文飾の方法から説得の論理、議論の論理へと拡張し、新たな方向性を示した古典的著作。日常的な議論を扱う非形式論理学へも大きな影響を与えた。非形式論理学を研究する人には必読の本。

ピーター・トーマス・ギーチ『合理的思考のすすめ』西勝忠男訳、法政大学出版局、1984
P. T. Geach, *Reason and Argument*(1976)の翻訳。哲学を専攻しない大多数の学生のための論理的思考のテキスト。日常的な実生活における思考習慣の改善を目指す。形式論理学（記号論理学）を使いながらも、推論の妥当性を含む広い意味での合理性を目指している。コンパクトな本で、授業で使いやすいように章ごとに問題がついている。現代的な観点からすると、哲学的な考察が多く、少々読みにくい点もある。

アレックス・C・マイクロス『虚偽論入門』須原一秀訳、昭和堂、1983

A. C. Michalos, *Improving Your Reasoning*(1970) の翻訳。（サーベイ「非形式論理学の初期の発展とクリティカル・シンキングの起源」参照）1章が議論（論証）の説明で、後は誤謬論（虚偽論）という、典型的な誤謬論的アプローチの本。中身は伝統的な誤謬論だが、誤謬のパターンがこれだけ整理されて読める日本語の本は少ないので貴重な文献。訳語は工夫されているものの分かりにくい訳もあり、注意が必要。

ジョン・ノルト、デニス・ロハティン『マグローヒル大学演習 現代論理学（Ⅰ）』加地大介訳、オーム社、1995

ジョン・ノルト、デニス・ロハティン『マグローヒル大学演習 現代論理学（Ⅱ）』加地大介・斎藤浩文共訳、オーム社、1996

日本語で読める論理学の教科書としては、珍しく非形式論理学を取り入れている本。中心は形式論理学だが、Ⅰ巻1，2章では、日常原語を用いた議論の構造、隠れた前提や議論の評価、関連性、帰納的確率を取り上げ、Ⅱ巻1，2章では、誤謬論と帰納推論を扱っている。形式論理学と非形式論理学をつなごうとする教科書。非形式論理学を手っ取り早く知りたい人にもおすすめ。

<論理学系>

野矢茂樹『論理トレーニング』産業図書、1997

哲学者の手による教科書。12章から成るので、1章1回のペースで、大学のセメスターで使い終わる。議論の分析と解釈→議論の評価の方法→議論の作成、という北米における「クリティカル・シンキング」の典型的な進め方をとるが、同時に日本における大学一年生の教育事情に充分、配慮している。「順接」・「逆接」に着目して議論を分析させる導入部は、「国語」の延長として学生に違和感なく受け入れられ、途中の「論証」・「演繹」あたりは従来の「論理学」への橋渡しとなり、最後の「議論を作る」は、レポート作成や論文執筆の基礎を養成するであろう。

野矢茂樹『論理トレーニング101題』産業図書、2001年

「解説書なんかいくら読んだって論理の力は鍛えられない。ただ、実技あるのみ」の精神で、「電車の中でもできるように」解答しやすい形式で、議論の解釈や評価を中心に101題の論理トレーニングの問題をそろえている。題材となる論証は実際に刊行されている本などから集められたもので、話題はさまざまな領域にわたり、自然に議論のなかに巻き込まれて問題にも楽しく取り組めるものである。また、各例題についての解説も詳しく鮮やかであり、一人で取り組んでも十分な成果があがるであろう。この分野における哲学系の好著であるといえる。ただし、あくまで議論の論理的な分析に焦点を絞ったもので、情報ソースの評価や観察の解釈などを含むクリティカル・シンキングのすべての技術が学べるわけではない。

齊藤了文・中村光世『正しく考える方法』晃洋書房、1999

論理学を日常的議論に適用するための教科書。日常的な議論を分析し評価するための技術を学ぶための本。練習問題も多く、論理学の授業を、日常的なものに改善しようと言う

人には最適。看護学校等の論理学の授業で教科書として多く使われているそうである。演繹的議論が中心のため、日常的な議論の分析としては少々物足りない面もあるが、自然な言葉を使った論理学の入門書としても使いやすい。

<心理学系>

E.B.ゼックミスタ・J.E.ジョンソン、(訳)宮元博章・道田泰司・谷口高士・菊池聡『クリティカルシンキング (入門篇)』、北大路書房、1996

E.B.ゼックミスタ・J.E.ジョンソン、(訳)宮元博章・道田泰司・谷口高士・菊池聡『クリティカルシンキング (実践篇)』、北大路書房、1997

心理学者の書いたクリティカル・シンキングの本。原書は一冊の本であり、内容もつながっている。個人が日常生活で直面する問題に役立つ「思考の原則」を使ってクリティカルな思考を伸ばすというアプローチをとる。7章～9章（問題解決・意志決定・議論）が狭義のクリティカル・シンキングにあたり、特に9章は議論を扱っているが、簡略に過ぎるのが残念である。本書の特徴は、2章から6章の、原因と結果、他人の行動、自分自身等についての思考の陥りやすい罠やバイアスを心理学の成果を使い示しているところである。クリティカル・シンキングへの認知心理学的アプローチとして興味深い。

道田泰司、宮元博章、(まんが)秋月りす『クリティカル進化(シンカー)論―「OL 進化論」で学ぶ思考の技法』北大路書房、1999

上記の本の訳者たちが、より分かりやすく心理学的なクリティカル・シンキングのエッセンスをまとめた本。「OL進化論」のマンガを使って、日常的な場面に即して、楽しく分かりやすくクリティカル・シンキングの技術を身につけられるように工夫している。典型的な誤謬の例などは、論理学の授業でも使えそう。心理学的クリシンを手軽に知りたい人におすすめ。

<ビジネス系>

グロービス・マネジメント・インスティテュート『MBA クリティカル・シンキング』ダイヤモンド社、2001年

クリティカル・シンキングを「ビジネスパーソンが仕事を進めていくうえで役立つように」という観点でまとめた本。論理展開の基礎、思考の落とし穴、因果関係の把握、構造化など、ビジネスに役立つように整理され図示されている。理論的には少々物足りないが、実践的で分かりやすいものと言える。練習問題も実際のビジネスに関係したものが多く、経済学部などでクリティカル・シンキングを教える際には参考になる。

渡辺 パコ『論理力を鍛えるトレーニングブック』かんきビジネス道場、2001年

グロービス・マネジメント・スクールの講師が書いた、ビジネスの基礎体力となる論理思考を鍛える本。演習が多く、受講生の答えに対して筆者が講評するという形で、読みやすく分かりやすい。あまり厳密とは言えない所もあり、説明がまずい点もあるが、ビジネスの現場で実践的には役立ちそう。具体的な課題の分析はなかなか興味深い。

<その他>

足立幸男『議論の論理—民主主義と議論』木鐸社、1984

政治哲学者の手による、議論による合意形成の意義とノウハウを教えるための教科書。民主的問題解決のために市民として最低限、体得すべきものという著者の政治哲学者としての問題意識が随所に感じられる。古典的な議論の分析から著者独自の理論まで、具体的な問題を背景にして展開される。最後の章は、その理論を用いた中絶論争の分析であり、これも興味深い。出版年度が古いのが残念だが、巻末参考文献表も参考になる。

香西秀信『反論の技術—その意義と訓練方法』明治図書出版、1995

議論の能力を高めるためには、反論の技術を身につければ十分であるという筆者が、反論の自修法と訓練法を解説した本。筆者によれば、意見を述べるとは先行する意見に対する異見であり、反論は議論の一要素ではなく議論の本質なのである。反論は、主張と根拠を確認し、議論を吟味することであり、論理的に、クリティカルに考えることにつながる。クリティカル・シンキングへの一つのアプローチとして考えると非常に興味深い。『議論の技を学ぶ論法集』明治図書出版、1996、『修辞的思考—論理でとらえきれぬもの』明治図書出版、1998も参考になる。より手軽に読める新書版も出ている。『論争と「詭弁」—レトリックのための弁明』丸善ライブラリー、1999『議論術速成法—新しいトピカ』ちくま新書、2000

小野田博一『論理的に考える方法—判断力がアップし本質への筋道が読める』日本実業出版社、1998

論理的に考えるための、すぐに役立つ助言集に近いものを目指した本。ハウツー本のようだが、「議論」argument を基づき、基本的なところはしっかりおさえてある。日本人の論じ方の欠陥をあげながら実践的な処方箋を示しているところは参考になる。『論理的に話す方法—説得力が倍増するワークブック』日本実業出版社、1996、『論理的に書く方法—説得力ある文章表現が身につく』日本実業出版社、1997などの姉妹編もある。